

toinumであつたのである。

十二世紀になると、此の方面の形勢が一變した世紀の初頭、高麗の將軍尹瓘は、有名なる九城の役を起し、咸興平野の女真部落を悉くなぎ倒して確實に其の地を占有した。たゞこれは一時のこと

で、生女眞の完顔氏が之を譲り受けたが、其の結果、此の樞要なる地は、全帝國の領土の一部となり、咸興には曷懶といふ行政官廳の設置を見、女眞の海寇はおのづから罷んだ。

## アメリカ發見前後の地圖地球儀とジバング (下)

文學博士 石 橋 五 郎

### 五

ジバング及び之と類似の名稱は、第十四世紀の初め、既にマルコポーロの紀行アブルフェダの地誌等に見えたるが、現存の地圖地球儀中にて其の名稱の現れたる最古のものは、上述の如く一四九二年に作製せられたベハイムの地球儀である。此

の地球儀に於てジバングは、

Oceanus Indie superior 及び Oceanus orientis Indies

Cathay 兩海の中間に在る南北に長さ一大島であつて、

其の世界的位置は上述の如く歐洲の西端と經度約九十九度、支那の東岸とは同約二十度を隔て、南北の位置は北緯約七度の邊より凡そ同約三十度の邊に及び、大部分は熱帶圏内に在る。

ベハイムガジバングをかく描出せし根據は何れに在りしか、ベハイム自身も相當の旅行家であつたから、一部分は自己の知見に基きたるものなるべしと雖も、一部分は當時迄に最も完備せりと考へられしトスカネリーの世界圖に據つたやうである。殊に、ジバングの東西の位置は、トスカネリーに負ふ所が大であつた。

然しベハイムにしても、トスカネリーにしても、ジバングに關する根本の資料は、マルコポーロの紀行文に在つて、ベハイムのジバングの側には明かに、

ジバングの島は世界の東端に在り。住民は偶像を拜し國王は何人にも從屬せず。島には甚だ多くの黄金並に寶石、眞珠を産す。此事はヴェニス(註1)のマルコポーロによりて、彼の第三卷に認められたり。

と記して居る。然らばトスカネリーや、ベハイムに對し、ポーロは如何なる資料を残したか。之が

ジバングの位置と地形と解釋する最も大なる鍵輪である。ポーロの残したる資料は、彼の著名な紀行の外、世界圖があつたと(註1)言ふ説がある。即ち一四二六年に葡萄牙のペドロ公が、ヴェニスの市長より獲た地圖は、ポーロの自筆に成りしものか或は其の複寫であると言ふことである。然しユールは之をポーロの地圖に非ずして、(註2)ヴェツシエルも其の地理學史の中に、ポーロが地圖を残さなかつた事を斷言して居る。(註3)今日迄の學者の研究では、ポーロが地圖を残した證左はない。

既にポーロの地圖がなかつたとすれば、ポーロの紀行より後に世に出でし地圖は、作圖者の考を以て其紀行を解釋し、之を圖上に描出したものである。彼の著名なる一三七五年作のカタラン世界圖(Catalan map)も、ポーロの紀行に基ける所が多く、殊に東洋に關して、支那の南より東に、無數の島

嶼を描出せるは、多分ポーロの紀行 (Book III) に「China の海に七千四百五十九の島あり」と言ふに據つたものであらう。尤も此のカタラン世界圖にはジバングが現はれて居ない。フラマウロの世界圖の東洋も、略々カタラン世界圖と同様である。

トスカネリーが世界圖を作るに當り、ポーロは又有力なる憑據となつた。彼はポーロの紀行を一方には彼の地理學上の識見により、他方には、當時迄の地理的事實とを加へて、彼の世界圖を作りしやうである。彼がフェルナンド、マルチネー (Fernando Martinez) に與へし書翰(註4)の中に、

リスボンより西方キンセイ (Quinsay 杭州) 迄は、二十  
六スバチア (Spatium) にして、地球全圖の約三分の一  
なり。而してアンチリア (Antilia) の島よりジバング迄  
は十スバチアなり。

と言へるは、トスカネリーが當時の地理學觀とポーロの紀行に據りて距離とを按配せる結果と見る

事が出来る。此のトスカネリーの斷定は、即ちベハイムの地球儀上の描寫となつたものである。

ベハイムの地球儀を見ると、歐洲の西端 (ベハ、イムには英國の島となつて居る) と支那の東岸とは經度約百二十度を隔つるも、リスボンと杭州とを取れば、約百三十度となる。これは恰もトスカネリーの計算に合するもので、トスカネリーは、この間を二十六スバチアと言つて居る。ワグネルの研究によれば、當時の一スバチアは經度五度(註5)であるが故に、二十六スバチアは、經度百三十度となり、ベハイムの圖と合する。トスカネリーはジバングの位置を直ちに、アンチリアより十スバチアとのみ記せるが、ベハイムの地球儀には、アンチリアを恰もリスボンとジバングとの中央の北回歸線上に置きたる故、これを基として、トスカネリーの示數を計算すると、リスボン、ジバング間は經度約百度となり、之をリスボン、キンセイ間の

百三十度より減ずれば、ジバングの東端は支那より約三十度となつて、ベハイムとトスカネリーと一致することとなる。唯支那とジバングの距離をトスカネリーは示して居ないが、ポーロに據れば此の間の距離を千五百里としてある。茲に言ふ一里は多くの學者の認むる如く、支那里であつたらうが、當時は之を伊太利里と考へたのである。伊太利里は、緯度の六十分の一即ち略々今日の一裡に等しき故、之を經度に換算すれば約二十五度となる。ベハイムが支那よりジバングを距離約經度二十度と三十度の間に置いたのは、恰も亦之に合するのである。

兎に角これによりて、ベハイムに於けるジバングの東西の位置は、トスカネリーとポーロにて、略々解釋が出来る。然るに南北の位置に就いては其の解釋は、頗る困難と言はねばならぬ。

何故ベハイムがジバングを北緯約七度より同約

三十度間に描き、大部分を熱帶圈内に置いたであらうか。この位置はラオンの地球儀も略同様であつて、其の後に雖も上述の如く久しく、歐洲地圖學者を支配した。是は又恐くは、又ポーロの紀行を誤解せし結果と考へらる。ベハイムがジバングの大部分を北回歸線邊に描きし原因の一部は、ジバングをポーロの説話の中心たりしザイツム(泉州)の東と考へしことにもあらう。然しポーロの紀行(註6)はジバングの位置を示して、

Chipangu is an Island towards the east in the high seas, 1500 miles distant from the Continent; and a very great Island it is.

とあり、必ずしもザイツムの東とはない。故にジバングの南北の位置の描寫をザイツムと結びつけて考へることは、不當であつて、予を以て之を見ればベハイムは主として、ジバングの物産を標準として描いたものと思ふ。

ベハイムのシバング島の上には左の記事あり。

シバングは、多くの黄金を産する所。

シバングは東方に於ける最も文化進み、豊饒なる島に

して、香料(Spices)及寶石に滿つ。此の島には黄金

の藥味(essenz)を發見す。

是等の産物中香料と藥味とは、共に南洋熱帯地方の産物であつて、桑原博士(註7)の所説の如く、支那に

於ては、唐宋時代より、南洋よりの重要貿易品であつた。然るにベハイムは、之をシバングの物産

として、シバングの位置をも亦熱帯圏内に置かれ

たるものではあるまいか。茲に注意すべきは、シ

バングに香料藥味を産することは、ポロの紀行

に明瞭なる記載はなく、其の第三卷第四章に前章

に在るシバング記事に引續き支那東南海の Sea of

Chin の諸島を叙し、其の中に、

And there is not one of those Islands but produces

valuable and Odorous woods like the lignaloe, ayre

and better too; and they produce also a great Variety of spices. For example in those Islands grows

pepper as white as snow, as well as the black in

quantities.

とある故、ベハイムのシバングの記入は恐くは、

之に據りしものであらうが、之を直ちに日本の記事と見

ることは出来ない。之は寧ろ日本に關する記事に

あらずして、南洋諸島の記事である様である。

我が日本の産物として、香料、藥味、香木は決して

著名なるものではなく、元以前の支那の文献中我が國

の物産を掲げしものは晋書夷列傳倭人の條下に、

其地温暖、俗種禾稻紵麻、而蠶桑織績、

とあり。通典の邊防一東夷上倭の部に

其國土俗宜禾稻麻苧蠶桑、知織績爲縹布、出自珠青玉

其山出銅、有丹土氣温暖、冬夏生菜茹、無牛馬虎豹羊

有薑桂橘椒藜荷、不知以爲滋味。出黑雉有獸如牛  
とある。通典中に在る物産には香料に類するもの  
もあるが、決して著しきものではなく、少くとも之  
が我國の重要物産でないことは明かである。宋史  
日本國傳には、我國より支那に贈りし方物を多く  
掲げて居るが、香料に屬するものは一もない。若  
し我が國の香料が著名であれば、當時香料貿易の  
盛なりし時代に於て、方物中に之を見出さぬ筈は  
ないと信ずる。

要するにベハイムの日本の位置は、ポロロの紀  
行の誤讀に起因するものと考る事が出来る。

更に吾人に假説を提出するを許すならば、ポー  
ロ紀行第三卷第四章は或は其のテキストに、錯誤  
があつたのではあるまいかと言ふ事である。ユー  
ル譯、ポロロ紀行に據れば、ポロロの紀行中ジバ  
ングに關する記事は、主に同書第三卷第二章で第  
三章に在り。第四章は一部分ジバングの續きの如

く見えるので、多くのジバングの研究者は、第四  
章をもジバングの記事とし、テレキーも亦其の記  
事をジバングとして轉載して居る。<sup>(註8)</sup>然しこの章に  
はジバングの名稱は少しもなく、唯 *this Island*、  
*that Island* と在り。之が第三章のジバングを受け  
居るものと解釋せられて居るが、此の *this Island*、  
*that Island* は、果して我が日本を指せるものか甚  
だ疑しい。

殊に此の島には喰人の俗ある事を述べて居るの  
は頗る奇怪である。マルコポロには第二章の初  
めに於て、ジバングの住民を記して、

*The people are white, civilized, and well favoured.*  
*They are idolaters, and are dependent on nobody.*

として居るのに、第四章には、

*But I must tell you one thing still concerning that*  
*Island (and 'tis the same with the other Indian Island)*  
*that of the natives take prisoner an enemy who can*  
*not pay a ransom, he who hath the prisoner sum*

mons all his friends and relations and they put the prisoner to death, and then they cook him and eat him, and they say there is not meat in the world so good!

とあり。若し第四章の記事がジバンケに關するものとすれば、第三章の記事とは餘りに大なる矛盾ではあるまいか。ポーロの如き世界各地の風俗習慣に通曉せる大旅行家が、同一のジバンケに對し初めに其の文化を讚美しながら、次章に於て蠻野の極惡たる喰人の風俗を肯定する理はないと信ずる。

之を我が國の風俗に關する支那古代よりの記に就いて見るに、支那にては可なり古くより、吾國の文化を認めて居る。後漢書に見えた「東方君子國」は必ずしも、吾國に非ずとしても、隋唐の頃には、支那人は我が文化を了解し、唐の李延壽の撰したる北史には倭國の條下に、

人頗恬靜、琴爭訟少盜賊、樂有五弦琴笛

とあり、續日本紀に據れば、文武天皇慶雲元年に歸朝したる遣唐使粟田真人の復命に、

唐人謂我使曰、亟聞海東有大倭國、謂之君子國、人民豐樂、禮儀敦行、今看使人、容儀大淨、豈不信乎。

とあり、假令史料は吾國のものとしても、支那人の本邦人に對する感想を窺ふ事が出来る。更に元史日本傳を按ずるに、ポーロの支那に來りし數年前の至元六年、元世祖が趙良弼を日本に使せしめし時の書にも、

日本素號知禮之國、王之君臣、寧肯漫弗思之事乎。

とあり元人は既に十分に日本の文化を知悉せし筈にて、元朝に仕へしポーロが日本人を野蠻蒙味の喰人民族と考ふることは、到底信じ難い。ポーロの記せし喰人島は恐くは南洋附近に於ける一島であつて、此等に就きては、支那の典籍に散見せるものもないこともない。例へば南史の列傳第六十九に倭國を叙せし後、

又南有黑齒國裸國、去倭四千餘里、船可行一年至、又西南萬里有海人、身黑眼白裸而醜、其肉美、行者或射而食之。

とあり其の何處を指せしや明かならざれども、今日の南洋中の一島を指せしものにしてポロロの喰人の俗ある島は或は此等の傳聞か。或は又三才圖會に「晏陀蠻人、身如黑漆、號山蠻能食生人」とあるアンダマンの如き島なりしやも知れず。兎に角ポロロが喰人と記せる島は日本に非らざること確であるに信ずる。

然らば何故に此等の記事がポロロの紀行中にジバングの記事として後世迄取扱はれしか、予の私見によれば、是は恐くはポロロに紀行のテクニストの不完備より生じたるものであつて、察するにポロロの原著第三卷第四章の初めには何か他の記事がありしを、其の部分だけ後世に離脱し、他島の記事が直ちに日本の記事の如く解釋せられしもの

ならん。或は左なくとも第四章に見えしジバングを指すと考へられたる this Island that Island は指代名詞若くは單複の誤譯より又ジバングと誤れたりしに非ざるか。ポロロの紀行は久しく寫本として世に行はれ、又其の原文は古代佛蘭西語にて記されたる故、轉寫反譯等の間に錯誤の生ぜしと見るは決して不當の見解にはあるまい。要するにベハイムに在るジバングの位置は、ポロロの旅行記により謬られ、永く世界の地圖界の過誤となつたものと考へる。

ベハイムの地圖が、ポロロの紀行により過たれたるは、獨り其の位置のみでなく、其の形に於ても然りである。ベハイムに於けるジバングの形は海岸屈曲の少き一大島なるが、是は著しく我國の地形とは異つて居る。ベハイムがかく屈曲なきものとしたのは、矢張りポロロの紀行第三卷第二章に、元の水師が日本に冠せし時の狀況を記せし中



に、

And it came to pass that there arose a north wind which blew with great fury, and caused great damage along the coasts of that Island, for its harbours were few.

とあるに據つたものであらう。然しこれは、ポロの傳聞の誤りであつて、元の船艦が暴風の爲め全滅せしより、吾國に避難すべき港灣少しと斷じたものであらう。

此の如くにして、ベハイムのジバングは徹頭徹尾ポロに誤られたるものと言ふも過言ではあるまい。而して、この誤りたる位置地形はベハイム後四十年間歐洲の地圖學界の一部を支配したものである。

(註一) Major's P. Henry, p. 62

(註二) Colonel Henry yule, The Book of Ser Marco Polo.

Introductory Notice p. 107

(註三) O. Peschel's Geschichte der Erdkunde s. 177

(註4) Teleki's Atlas s. 7.

C. H. yule, Cathay and the way thither CXCVI

(註5) Wagner, Toscanelli S. 224-5 Vol. I. CXCVII

(註6) Yule, Marco Polo, Book III, Chapter II.

(註7) 桑原博士、蒲羅庚の事蹟。二六五頁乃至二六七頁

(註8) Teleki's Atlas s. 4

## 六

ベハイムの地球儀の成りし一四九二年は即ちロンプスの新大陸發見の年であつて、世界の地圖界が之によりて大なる衝動を受けしことは當然である。而してジバングに關する限りに於ては、上述の如く新大陸發見直後の一五〇〇年に成りしコサの世界圖、並に一五〇八年のルイシユの世界圖には、共にジバングを脱して居る。之は決して偶然ではなく、ロンプスの新大陸發見によりて、ジバングの問題は解決せられしものと考へたのであつて、中にもルイシユの世界圖には、新發見の

スバニョラ (Spagnola) 島の左方には次の如き挿句がある。

イスパニアの航海者によりて、發見せられたる島は恰もジバングの位置に當るが故に、イスパニア人によりて、イスパニア (Hispaniola) と呼ばれたる地はジバング (Sipangus) ならざるべからず。仍りて此の島を圖上に表はさず。ジバングに關する凡ての逸話は、偶像崇拜を除き、悉くイスパニョラに當嵌むるを得べし。

といふて、ジバングを脱せし理由を説明して居る。而して新陸地とジバングとを同一と看做せしルイシユのこの記述は、コロンブス西航の目標がジバングの到達に在りしならんとの想定を、側面より證據立つるもので、興味ある挿句と言はねばならぬ。

兎に角一五〇八年迄は歐洲の地圖學界少くともルイシユの郷國たる和蘭邊にては、新大陸即ちジバングと信じて居たものである。

ルイシユの世界圖に先つこと八年、新大陸發見後八年に成りしコサの世界圖には、ジバングに關する何等の描寫もなく、唯新陸地を非常に大きく現はし、赤道の南北に誇る大陸地として描かれ、ジバングは之に覆はれて居る。コサは上述の如くコロンブスの第二航海は同乗せし海員故、其の第一次第二次の航海により、續々新陸地を發見せしものから、ジバングの如きは既に眼中になく、唯之と比較すべからざる程の大陸あるべしと希望を抱負との下に、ジバングを削り非常に大なる新陸地を現せしと考へらる。何れにしても新大陸發見直後に在りては、歐洲の地圖學界に於てジバングは新大陸の一部と考へられたるものにして、之は(註1)ユールの説の如くコロンブスの死に到る迄の考であつたのみならず北歐羅巴邊にては、數十年の後迄、引續きこの考があつたやうである。

(註1) Jule, Cathay, vol. I, CXLI.

七

新大陸發見後、西班牙人が専ら今の西印度諸島

中央アメリカの發見に腐心せし間に、葡萄牙人は

一五〇〇年既に南米ブラジルの海岸を發見し、一

五〇二年には、ブラジルの海岸を南下して、南緯

二十六度三分のカナネア(Cananea)灣迄、進み、翌

年も葡萄牙人はブラジルに探險隊を送つて居る。

従つて第十六世紀の始め葡萄牙の材料によつて作

られた地圖、地球儀ありとせば、南半球に精しく

北半球に疎くあるべき筈であつて、一五一一年の

レノツクスの地球儀とシルバヌスの地圖は之を代

表するものであらう。此の兩者は共に北米の描寫

を甚だ粗略にしてあるが、南米に關しては前諸地

圖より詳密であつて、レノツクスの地球儀の如き

は既にブラジルの名を記入し、シルバヌスには、

南米の山水が比較的詳密に描かれて居る。之は主

として、葡萄牙の材料に據つた故と考へる。此の事は地球儀と地圖に於けるシバングの解釋の上にも注意すべき事である。

シバングはコサ、ルイシユの二圖に於て、一旦消失したが、今此地球儀と地圖とに於ては、再び現はれ、而も其の位置が前二者と異り、シバングは北緯三十度の上に在り、東西の位置は新發見のテラ、クバより約四十度を隔て、寧ろ支那と大いに接近せし如く描かれて居る。之れは如何なる理由によるものであらうか。惟ふにシルバヌスの圖は、彼がアドリヤ公に之を献ずる時、その抱負を披瀝して居るやうに、トレミー地圖の大増訂をなし、圖法も新案の Homeer projection を用ひて居る程であるから、シバングの位置も相當注意を拂ひ、從來の如くマルコポーロやベハイムに捉れず彼の見識にて描いたものであらう。彼がマルコポーロに捉はれない事は、支那の地形を見ても知る

ことが出来る。然し夫よりも彼をしてジバングの位置を決定せしめ最大原因は多分葡萄牙人の知識であつたらう。當時葡萄牙人は既に海路印度を攻略し餘程東洋の事情に通せし故、ジバングの位置も従来よりは稍正しく知られた筈であつてシルバヌスは恐く之に據つたものであらう。尤もシルバヌスがジバングに就いて葡萄牙人の知識に據つたと言ふ確證はないが、ペツシエルの研究(註一)によればシルバヌスの地圖は一五〇三年の (charta Marina Portugalsium) なる類似があることを言ふから、かく斷じても敢て誤はなからうと思ふ。兎に角シルバヌスの地圖は第十六世紀頃の地圖としてはジバングを稍正しく取扱つたものである。

(註一) Peschel, Geschichte der Erdkunde S. 241

## 八

一五二二年に刊行せられたストブニクザの地圖

は簡單ではあるが、地圖學上一時期を劃するものである。そは此の世界圖に於て初めて、世界を舊と新との二半球に分け、又新大陸に南北の二大陸を示し其の間を狭き地峽にて續け殆んど今日の地形と一致せしめて居ることである。之は新大陸に對する十分の知識なしには描寫し能はざることであつて、殊に中米の地峽の描出は甚だ珍とするに足る。

従來傳へられし處にては、歐洲人の中米の地球たるを知り、太平洋を發見したるは、西班牙のバルボア (Nunez Balboa) が一五一三年九月二十五日ダリエンの山上に登り、初めて太平洋を望見せし時とせられて居るが、ストブニツカは既に其の前年に其の地峽たる事を地圖の上に現はし、大西太平洋を明かに區別して居る。これは確かに當時の新大陸に赴きし西班牙人より得たる詳密なる資料により斷定した結果と見ることが出来る。

而して、新大陸の精密なる知識は又ジバングの

存在にも關係し、ジバングは再び新大陸の西方に

接して置かれたるは、蓋し、初め新大陸即ちジバ

ングなりと信じたる西班牙人が、新大陸探險の進

歩に連れ、其の地がジバングと異なるを知り、再び

ジバングの存在と認めたるものであらう。然し西班

牙人は葡萄牙人の如く亞細亞に關する知識なく、

已むを得ずジバングを再びベハイムの位置に置き

兎に角其の存在丈けを認めたものと解すべきか。

此の想定はワルドゼーミュラー、ブーレンゲル等

同時代の圖にも共通の事と信ずる。唯ブーレンゲ

ルの地圖に於て、ジバングの東西の位置が歐洲よ

り遠ざかりし事は、新大陸の擴張に伴ふ當然の歸

結であつて、亞細亞大陸との隔りの大となりしは、

從來過大に考へられし亞細亞大陸の東西の廣りが

漸次に縮り來りし結果であつて、又世界圖進歩の

當然の過程と言はねばならぬ。

(註1) 發見時代の初期に於て西班牙人ミ葡萄牙人とは互に其の發見を秘して居た。

## 九

かくて一五三〇年代に及ぶや、一方には、地圖

學がメルカトールの出現によりて、異常なる發達

をなし、他方には、東洋に於ける葡萄牙人の通商

上宗教上の活躍によりて、東亞細亞の地理は非常

に明かになつたから、世界地圖上に於けるジバン

グも亦舊態を改め、メルカトールの世界圖の如く

位置と地形とに於て大なる變化を生じた。(註2) 然しこ

の圖の成りし一五三八年迄には、歐羅巴人にして

親しく日本を訪ひしものなく、日本に關する知識

は支那に於ける傳聞が主たるものであつたらうか

ら、此等の材料に據つて描かれたと思はるゝジバ

ングの位置が餘りに北に偏し、又其の形も過小に

失して居るは蓋し已むを得なかつたと思ふ。

然るに一五四二年に葡萄牙人、ピントー(Pinto)

ゼーモト (Zeimoto)、ボネロ (Borelio) の三人が我が國に漂流し、其の記事が先づマラッカの葡萄牙總督たりしアントニオガルバン (Antonio Galvano) の書によりて、一五五七年歐洲に紹介せられた。これによれば左の如く日本の位置が正しく記述されて居る。

Directing there course to the city of Liampo [Ningpo 寧波] standing in 30° odd of latitude, there fell upon their stern such a storm, that it set them off the land; and in a few days they saw an island towards the east, standing in 32°, wick they do name Japan, which seemeth to be the isle of Zipangry where of Paulus Venetus [Marco Polo] maketh mention, and of riches here of. And this island of Japan hath gold, silver, and other riches.

Hackluyt 譯 Galvano's Book

(Childreth, Japan as it was and is, p. 22 より轉載)

茲に云ふ北緯三二度はビントー等の漂流せし種

子島より稍北であるが、大體に於て我日本の南端

として正しき記述を謂はねばならぬ。オルテリウスが、世界圖を作りしは、此のガルバノ小著の出版せられし二十三年後であるから、恐くはジバングの參考資料として利用せられしなるべく、之にオルテリウス自身の學識に因り、彼の圖にはジバングを北緯三十度乃至四十度の間に畫き、支那との間隔も僅かに、經度五、六度に縮めたものと思ふ、洵に自然の歸趣と言はねばならぬ。

(註一) D'Orsey, Portugues Discoveries Dependencies.

(註二) 藤田豊八博士「葡萄牙人澳門占據に至るまでの諸問

題」東洋學報第八卷

前號本論文中メルカトル圖中ジバンユーの位置を支那を距るその緯度數約十度とあるは經度數の誤。

(註三) Childreth, Japan P. 21.

一〇

ジバングの名稱が初めて現はれたりを信せらる

るトスカネリー圖の成りし一四七四年より、オル  
テリウム圖の公にせられし一五七〇年まで殆んど  
百年、アメリカ發見を挿む前後一世紀の間、世界  
地圖史上に於けるジバングの地位は、幾變遷を遂  
げたりと雖も、其の根柢をなしたものは、常にマ  
ルコポーロの紀行であつた。ポーロはジバングの  
名を初めて世に紹介したとは云へ、其の紀行は多  
くの地圖學者により、或は誤り解釋せられ、或は  
テキスト自身の不完全に起因して、地圖上に於て  
初めは著しく、其の眞實に遠かつたが、其の後地  
圖學の進歩と歐洲人の世界的發展と相俟つて、漸

次其の正に近いた。而して之が最後の功績は、オ  
ルテリウスに在るが、正確なる地理的資料を供せ  
しは、日本を正しく見出しピントーと之を世に傳  
へたカルバノの書であらう。カルバノは百餘年來  
マルコポーロの紀行によりて、誤られたる日本の  
位置を初めて正しく世に紹介したのである。而し  
てカルバノの此の記事には上掲の如くジバングの  
地點を示したる後、再びポーロの名を呼んで居つ  
てジバングとポーロが地圖學の文獻上に於て、最  
後迄離れ難き關係にあつたことは、又一奇と言は  
ねばならぬ。